

朱子語類論文篇譯注 (三)

興膳 宏
京都大學

木津 祐子
京都大學

齋藤 希史
奈良女子大學

55 「歐公文字數腴溫潤。曾南豐文字又更峻潔、雖議論有

淺近處、然却平正好。到得東坡、便傷於巧、議論有不正当處。後來到中原、見歐公諸人了、文字方稍平。老蘇尤甚。

大抵已前文字都平正、人亦不會大段巧說。自三蘇文出、學者始日趨於巧。如李泰伯文尙平正明白、然亦已自有些巧了。」廣問、「荆公之文如何。」曰、「他却似南豐文、但比南豐文亦巧。荆公會作許氏世譜、寫與歐公看。歐公一日因曝書見了、將看、不記是誰作、意中以爲荆公作。又曰、介甫不解做得恁地、恐是曾子固所作。」廣又問、「後山文如何。」

朱子語類論文篇譯注 (三) (興膳・木津・齋藤)

曰、「後山煞有好文字、如黃樓銘・館職策皆好。」又舉數句說人不怨暗君怨明君處、以爲說得好。廣又問、「後山是宗南豐文否。」曰、「他自說曾見南豐於襄漢間。後見一文字、說南豐過荆襄、後山攜所作以謁之。南豐一見愛之、因留款語。適欲作一文字、事多、因托後山爲之、且授以意。後山文思亦澁、窮日之力方成、僅數百言。明日、以呈南豐、南豐云、「大略也好、只是冗字多、不知可爲略刪動否。」後山因請改竄。但見南豐就坐、取筆抹數處、每抹處連一兩行、便以授後山。凡削去一二百字。後山讀之、則其意尤完、因歎服、遂以爲法。所以後山文字簡潔如此。」

廣因舉秦丞相教其子孫作文說中說後山處。曰、「他都記錯了。南豐入史館時、止爲檢討官。是時後山尙未有官。後來入史館、嘗薦邢和叔。雖亦有意薦後山、以其未有官而止。」廣。揚錄云、「秦作後山敘、謂南豐辟陳爲史官。陳元祐間始得官、秦說誤。」

歐公的文章は、豊かであるおいがある。曾南豊的文章はさらに引き締まっています、議論に底の浅いところはありますが、素直なのがよい。蘇軾になると、達者すぎるのが缺點で、

議論が當を得ないところがある。後に中原にやつて来て、歐公などの諸公に出逢つてから、その文章はだんだん素直になってきた。老蘇がもつともひどい。おおむね昔の文章は、みな素直で、人柄からしてもそんなに達者に述べられはしなかつた。三蘇の文章が現れてから、學ぶ者は、日増しに達者さに走るようになったのだ。李泰伯の文章などは、素直でわかりやすいことを目指していたのが、やはり達者になってきている。廣が尋ねた、「荆公の文章は、どうですか。」いわれるには、「彼は南豊の文章に似ているが、南豊の文章に比べるとやはり達者だ。荆公が「許氏世譜」を作つたとき、寫して歐公に見てもらつた。歐公はある日、曝書のついでに目にして、とつてみると誰の作か思い出せないけれど、どうも荆公の作らしいとおもつたが、「介甫ではああはできない。たぶん曾子固の作だろうさ」といつた。」廣がまた尋ねた、「後山の文章はどうですか。」いわれるには、「後山にはよい文章がたくさんあつて、「黃樓銘」や「館職策」など、どれもよいできた。」さらに、人が暗君を怨まずに明君を怨むと述べたくだりを數句舉げら

れ、うまい敘述だ、とされた。廣がさらに尋ねた、「後山は南豊の文章を手本にしていたのでしょうか。」いわれるには、「かれは南豊に襄・漢のあたりで見えたと自分でいつている。後にある文章を見ると、南豊が荆・襄の地におもむいたとき、後山は自分の書いたものを持って彼に見えたといつている。南豊は一目で氣に入り、引き留めて親しく語らつた。(南豊は)ちようどある文章を書こうとしていたが、忙しかつたので、後山に書いてくれるよう託して、文意を傳えた。後山は構想をまとめるのに苦しみ、一日がかりでようやく仕上げ、わずか數百字にまとめた。明くる日、南豊に見せると、南豊がいうには、「だいたいはけっこうだが、むだな字が多いね。少し削つてもよいかね。」後山はそこで手直しを頼んだ。すると南豊は坐つて、筆を執りあちこち消したが、消した箇所はみな一二行もつづいており、そのまま後山に渡した。全部で百字から二百字削つてあつた。後山が讀んでみると文意がいつそう完全になつていたので、感服し、それから模範とするようになったのだ。だから後山の文章はこんなに簡潔なのさ。」

廣はそこで秦丞相が子や孫に文の作り方を教えた説のなかで後山のことに觸れた箇所を挙げた。いわれるには、「かれはすっかり記憶違いをしている。南豊が史館に入ったときは、檢討官に過ぎず、そのとき後山はまだ官位を得ていなかった。のちに史館に入つて、邢和叔を推薦したことがある。後山を薦めたい氣持はあつたのだが、官位を得ていなかったので止めたのだ。」廣記す。包揚の記録にいう、「秦は後山の文集の序を作つて、南豊が陳を招いて史官としたというが、陳は元祐年間に始めて官位を得たのであり、秦の説は間違いだ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 雖議論↓雖其議論 然却平正好↓然却平正好 荆公之文如何↓但比南豐文亦巧↓缺 又曰介甫：↓又云介甫： 曰後山煞有好文字↓先生云後山煞有好文字 曾見南豐於襄漢間↓曾見南豐於襄漢間 因托後山爲之↓因託後山爲之 南豐云大↓(細字雙行) 因歎服↓因嘆服 曰他都記錯了↓先生曰他都記錯了 揚錄云↓秦說誤↓缺 朝鮮古活字本 又曰介甫：↓又云介甫： 曾見南豐於襄漢間↓曾見南豐於襄漢間 因托後山爲之↓因託後山爲之 因歎服↓因嘆服 秦作後山敘↓秦作后山敘 (注) 「敷腴」「溫潤」ともに疊韻の語。歐陽脩の文章につ

朱子語類論文篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

いては、「執事之文、紆餘委備、往復百折、而條達疏暢、無所間斷、氣盡語極、急言竭論、而容與閑易、無艱難勞苦態。」(蘇洵「上歐陽內翰第一書」『嘉祐集』卷二二)や「公之文雍容典雅、紆餘寬平、反復以達其意、無復毫髮之遺、而其味常深長於言意之外、使人讀之諒然、足以得祖宗致治之盛。」(陳亮「歐陽文忠公文粹後敘」『龍川文集』卷三三)のような評價があり、「敷腴」「溫潤」の評とも通じよう。また47條を參照。

朱子以外にも、宋の文人については、「歐陽肉多而骨少、孫・石肉少而骨多、曾子固木篤而缺玲瓏、王介甫骨體而無豐采、皆不及蘇子瞻之俊逸也。」(王文祿「文脈」卷二)など、同時代人によるさまざまな比較論が爲されている。

「淺近」は、43條、「平正」は、17條を參照。また、この條に練り返し現れる「巧」については、41條を參照。

「李泰伯」は、李觀。43條を參照。

「許氏世譜」は、『臨川文集』卷七一。文中に「臨川王某」の文字が見える。

「煞」は、程度のはなだしいことを示す。「殺」に同じ。

「呂與叔文集煞有好處。他文字極是實、說得好處、如千兵萬馬、飽滿伉壯。」(程子門人 總論) 一〇一・255b)

「黃樓銘」は、「黃樓銘并序」(『後山居士文集』卷一七、

「宋文鑑」卷七三。

「館職策」は、「擬學士院試館職策」(『後山居士文集』卷

八。

「人不怨暗君怨明君」は、「顔長道詩序」（『後山文集』卷一六）の句、「致怨於明主、昏主則不怨也。」を指したものの。

「曾見南豐於襄漢間」については、「送邢居實序」（『後山文集』卷一六）に「吾年如生時、見子曾子於江漢之閒、獻其說餘十萬言、……」。朱熹「南豐先生年譜後序」に「師道見公於江漢之閒而受教焉」、「宋史」卷四四四本傳に「年十六、早以文謁曾鞏、鞏一見奇之、許其以文著、時人未之知也」などとある。

「歎語」は、うちとけて話すこと。

「文思」は、文章の構想。「文心雕龍」神思篇に「是以陶鉤文思、貴在虛靜」とあるのは有名。

「窮日之力」は、その一日せいっぱいの力を盡くすこと。もとは『孟子』公孫丑下に「諫於其君而不受、則怒、悻悻然見於其面、去則窮日之力而後宿哉」と見えるように、一日の行程をぎりぎりいっぱい進むことを言う。

「秦丞相」は、秦檜。字は會之、江寧の人。「宋史」卷四七三。

「教其子孫作文說」については、王明清『揮麈三錄』卷一にも、「秦會之暮年作示孫文云、曾南豐辟陳無己・邢和叔爲英宗皇帝實錄檢討官、初呈藁、無己便蒙許可、至邢乃遭橫筆……案曾南豐元豐五年受詔修五朝史、爲中丞徐禧所沮淺命、繼丁憂而終。蓋未嘗濡毫、初亦不曾修英宗實錄也。陳無己元

祐三年始以東坡先生傳欽之、李邦直・孫同老薦於朝、自布衣起爲徐州教授、距南豐之沒後十年始仕、亦未始預編摩也」と云う。

「邢和叔」は、邢恕、和叔は字。鄭州陽武の人。「宋史」卷四七一。

「秦作後山敘」については、陸游『老學庵筆記』卷七にも、「秦會之跋後山集、謂曾南豐修英宗實錄、辟陳無己爲屬、孫中益書數百字詆之、以爲無此事。南豐雖嘗預修英宗實錄、未久即去、且南豐自爲吏屬、烏有辟官之理、又無己元祐中方自布衣命官。……會之但誤以五朝史爲英宗實錄耳、至其辟無己事、則實有之、不可謂無也」と云う。

56 因言文士之失、曰、「今曉得義理底人、少閒被物慾激搏、猶自一強一弱、一勝一負。如文章之士、下梢頭都靠不得。且如歐陽公初閒做本論、其說已自大段拙了、然猶是一片好文章、有頭尾。它不過欲封建・井田、與冠・婚・葬・祭・蒐田・燕饗之禮、使民朝夕從事於此、少閒無工夫被佛氏引去、自然可變。其計可謂拙矣、然猶是正當議論也。到得晚年、自做六一居士傳、宜其所得如何、却只說有書一千卷、集古錄一千卷、琴一張、酒一壺、碁一局、與一老人爲

六、更不成説話、分明是自納敗闕。如東坡一生讀盡天下書、說無限道理。到得晚年過海、做(過)「昌化峻靈王廟碑」、引唐肅宗時一尼恍惚升天、見上帝、以寶玉十三枚賜之云、中國有大災、以此鎮之。今此山如此、意其必有寶云云、更不成議論、似喪心人説話。其他人無知、如此説尙不妨、你平日自視爲如何。説盡道理、却說出這般話、是可怪否。「觀於海者難爲水、游於聖人之門者難爲言」、分明是如此了、便看他們這般文字不入。」個。

ついでに文士の缺點を語つて、いわれた、「今は義理の分かつた人でも、やがて物慾に突き動かされて動搖し、氣持がふらふらしてしまう。文章の士などというものは、結局てんで當てにならん。たとえば歐陽公は初めのころ「本論」を書いたが、その説はまったくまずいものながら、いい文章ではあつて、首尾が整つてゐる。彼は封建と井田、それに冠婚葬祭や菟田燕饗の儀禮に、民衆を常に従わせ、やがて佛敎に引きずられる暇いとまもなくなくなり、おのずと變わつてくるようにしたいと考へただけだ。その計はまずいが、まっとうな議論ではある。晩年になつて、自ら「六一居士

傳」を書いたが、その得たものはどうだったのかをいうべきなのに、ただ書一千卷、集古錄一千卷、琴一張、酒一壺、碁一局と一人の老人で六になる、などという始末で、てんでお話にならん。明らかに自分でボロを出してしまつてる。東坡などは一生に天下の書を読み盡くし、限りなく道理を説いたが、晩年に海南島に行つて「昌化峻靈王廟碑」を書き、唐の肅宗のときにある尼僧が神がかりになつて天に昇り、上帝に會つて、寶玉十三を賜わり、もし國に災いが起つたときには、これで鎮めるのだなどとお告げをもらつた話を引いてきて、いまこの山はしかじかのありさまで、きつと寶があるのなんのというが、まともな議論になつておらず、正氣の沙汰じゃない。他の無知な人間がいうのなら構わないが、あんたふだんから自分をどう思つてたんだいってことさ。さんざん道理を説いておきながら、こんなことを言い出すなんて、おかしくはないかね。「海を觀る者は水と爲し難し、聖人の門に遊ぶ者は言と爲し難し」というが、そんなことがわかつていたら、彼らのこんな文章を讀んでも目に入るはずはないさ。」沈僩記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 下梢頭都靠不得↓下梢頭都却靠不得
且如歐陽公↓且如歐陽文忠公 做過化峻靈王廟碑↓做昌化峻
靈王廟碑 便看他們↓便看他們

朝鮮古活字本 以寶玉十三枚↓以寶王十三枚 便看他們↓
便看他們

(注) 「下梢頭」は、「下梢」と同じく、とどのつまり、結局の意。前文を承けて、否定的な結果に終わることを導くことが多く、ここも同様である。また、否定の語が強めの「都」を伴って續くことも多い。「平生也費許多功夫看文字、下梢頭都不得力者、正緣不熟耳。」(訓門人 九)一一一・2920)

「本論」は、『宋文鑑』卷九四、『歐陽文忠公文集』卷一七。「佛法爲中國患千餘歲」の句で始まり、佛法に反對して儒教を本とすることを唱える。ここで言及されている箇所を引けば、「昔堯舜三代之爲政、設爲井田之法、籍天下之人、計其口、而皆授之田。凡人之力能勝耕者、莫不有田而耕之、斂以什一、差其征賦、以督其不動、使天下之人力皆盡於南畝而不暇乎其他。然又懼其勞且怠而入於邪僻也、於是爲制牲牢酒醴以養其體、弦匏俎豆以悅其耳目、於其不耕休力之時、而教之以禮、故因其田獵而爲蒐狩之禮、因其嫁娶而爲婚姻之禮、因其死葬而爲喪祭之禮、因其飲食群聚而爲鄉射之禮。……耳聞目見、無非仁義禮樂、而趣之不知其倦、終身不見異物、又奚暇夫外慕哉。」

「六一居士傳」は、『宋文鑑』卷一四九、『歐陽文忠公文集』卷四四。ここで言及されている箇所を引けば、「居士曰、吾家藏書一萬卷、集錄三代以來金石遺文二千卷、有琴一張、有棋一局、而常置酒一壺。客曰、是爲五一爾、奈何。居士曰、以吾一翁、老於此五物之間、是豈不爲六一乎。」

「集古錄」は、歐陽修が集めた金石遺文を時代によって録したものの。『歐陽文忠公文集』卷一三四から一四三に收める。その序は『宋文鑑』卷八六にも載録される。

「敗闕」は、過失、誤り。また、破綻、汚損の意にも用いられる。「於是盡招兩軍女妓作樂爛飲、作爲傲歌。王勝之句云、『歌倒太極遣帝扶、周公孔子驪爲奴。』這一隊專探伺他敗闕、才聞此句、拱辰即以白上。仁宗大怒、即令中官捕捉、諸公皆已散走逃匿。」(本朝三 自國初至熙寧人物)一一九・3080)「王儉平日自比謝安。王儉是已敗闕底謝安、謝安特幸未疏脫底王儉耳。安比王儉只是有些英氣。」(歷代三)一一六・3242)

「過化峻靈王廟碑」は、『峻靈王廟碑』、中華書局「蘇軾文集」卷一七。「過化」は「昌化」の誤り。朝鮮寫本および和刻本は「昌化」に作る。「唐代宗之世、有比丘尼若夢悅惚見上帝者、得八寶以獻諸朝、且傳帝命曰、中原兵久不解、脛聞於天、故以此寶鎮之。則改元寶應。……五代之末、南夷有知望氣者、曰、是山有寶氣、上達于天。纘舟其下、剽山發石以求之。夜半、大風、浪驚其舟空中、碎之石峯下、夷皆溺死。」

儻之父老、猶有及見敗舟山上者、今獨有碇石存焉耳。……今此山之上、上帝賜寶以奠南極、而貪冒無知之夷欲以力取而已有之、其誅死宜哉」と云う。また、『舊唐書』卷十「肅宗本紀」に、「(上元三)〔七六二〕年壬子、楚州刺史崔旰獻定國寶玉十三枚……旰表云、楚州寺尼眞如者、恍惚上升、見天帝。帝授以十三寶、曰、中國有災、宜以第二寶鎮之。」「峻靈王廟碑」にあるように、この事件を機にこの年改元して「寶應」と定めた。

「觀於海者難爲水、……」は、「孟子」盡心下に見える語。「孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下。故觀於海者難爲水、遊於聖人之門者難爲言。」

57 問、「坡文不可以道理竝全篇看、但當看其大者。」曰、「東坡文說得透、南豐亦說得透、如人會相論底、一齊指摘說盡了。歐公不盡說、含蓄無盡、意又好。」因謂張定夫言、南豐祕閣諸序好。曰、「那文字正是好。峻靈王廟碑無見識、伏波廟碑亦無意思。伏波當時蹤跡在廣西、不在彼中、記中全無發明。」揚曰、「不可以道理看他。然二碑筆健。」曰、「然」。又問、「潛眞閣銘好。」曰、「這般閑戲文字便好、雅正底文字便不好。如韓文公廟碑之類、初看甚好讀、子細點

檢、疏漏甚多。」又曰、「東坡令其姪學渠兄弟蚤年應舉時文字。」揚。

「東坡の文章は道理によつて全篇を通して讀んではだめで、大きなところを讀むべきですね」と尋ねると、いわれるには、「東坡の文章はすべてを述べきつてしまふ。南豊もまたすべてを述べきつてしまふ。議論の達者な人のように、一遍に指し示して述べ盡くしてしまうのだ。歐公はすべてを述べ盡くさず、言外に盡きせぬ含みを持たせ、いわんとするとところもよい。」そこで張定夫が南豊の書いた祕閣の諸序をほめていることを申し上げると、いわれるには、「あの文章は確かによい。(東坡はという)」「峻靈王廟碑」は見識がないし、「伏波廟碑」も中身がない。伏波將軍の昔の足蹟があるのは廣西で、そこ(海南島)にはないのに、文中でもまったく説き明かしていない。「わたくし揚が、「道理として讀むわけには行かなくても、二つの碑文はいずれもしっかりした文章ですね」と申し上げると、「そうだ」といわれた。また「潛眞閣銘」はよいものですか」と尋ねると、いわれるには、「このような手すさびの文章

はいいが、まじめな文章となるとだめだ。「韓文公廟碑」のようなものは、はじめは読んで面白いのだが、細かく検討してみると、雑なところが多い。」またいわれた、「東坡は自分の甥にこれら兄弟（軾・轍）が若い頃科擧を受けた時の文章を學ばせた。」包揚記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 坡文不可以道理並全篇看↓坡文不可以道理并全篇看

（注）「說得透」は、言い盡くす、あらいざらい述べる。「透」は、徹底的に、の意。

「張定夫」は、張戒。「歲寒堂詩話」の著者として知られる。

「祕閣」は宮中の書庫。曾鞏が施した、「新序目錄序」をはじめとする祕閣の目錄の序は、「元豐類藁」卷一一に十一篇が見え、また「宋文鑑」卷八八には、「列女傳目錄序」「戰國策目錄序」「陳書目錄序」「南齊書目錄序」が載録される。「峻靈王廟碑」は、前條參照。

「伏波廟碑」は、「伏波將軍廟碑」。「宋文鑑」卷七七、「蘇軾文集」卷一七。

蘇東坡の文章を「健」と評することについては、次條および12條を參照。

「潛眞閣銘」は、「惠州李氏潛珍閣銘」。「蘇軾文集」卷一

九。

「韓文公廟碑」は、「潮州韓文公廟碑」。66條參照。

蘇東坡の文章が「疏漏」であることについては、次條も參照。また100條にも「蘇子瞻雖氣豪善作文、終不免疏漏處」（「論文上」一三九・330）と評される。

東坡が甥に自分たちの文章を學ばせたことについては、趙令時「侯鯖錄」卷八に次のようにいう。「蘇二處、見東坡先生與其書云、二郎姪、得書知安、并議論可喜、書字亦進。文字亦若無難處、止有一事與汝說。凡文字、少小時須令氣象崢嶸、采色絢爛、漸老漸熟、乃造平淡。其實不是平淡。絢爛之極也。汝只見爺伯而今平淡、一向只學此樣、何不取舊日應擧時文字看。高下抑揚、如龍蛇捉不住、當且學此。只書字亦然、善思吾言云云。此一帖、乃斯文之祕、學者宜深味之。」

58 人老氣衰、文亦衰。歐陽公作古文、力變舊習。老來照管不到、爲某詩序、又四六對偶、依舊是五代文習。東坡晚年文、雖健不衰、然亦疏魯、如南安軍學記、海外歸作、而有「弟子揚觸序點者三」之語。「序點」是人姓名、其疏如此。淳。

人は年をとると氣力が衰え、文章もまた衰える。歐陽公は古文を作つて、古い陋習を變えようと努めた。年をとる

と、注意が行き届かず、ある人のために書いた詩序は、四六對偶の文章で、五代の文章の習氣そのままになっている。東坡の晩年の文章は、しっかりと衰えていないが、やはり雑なところがあり、例えば「南安軍學記」は、海外から歸還後の作だが、「弟子解（さかずき）」を揚げて序點することと「三たび」などといっている。「序點」は人の姓名だよ。これほど雑なんだ。陳淳記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く

（注）年をとると文章が衰えることについては、「歐公文字大綱好處多、晩年筆力亦衰」（本朝四 自熙寧至靖康用人）一三〇・三二七）などのように、「語類」に散見される。

「照管」は、氣を配ること、注意を廻らすこと。「讀書法」上四條を参照。

「疏魯」は、「疏鹵」とも。いかげん、雑。前條の「疏漏」と同義。「此特關羽恃才疏鹵、自取其敗。」（歴代三）一三六・三二七）

「南安軍學記」は、『宋文鑑』卷八二、『蘇軾文集』卷一一。

「射之中否、何與於善惡、而曰「候以明之」、何也。曰、射所以致衆而論士也。衆一而後論定。孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵、使弟子揚觶而斂點者三、則僅有存者。」とあるが、「禮記」射義には、「孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵牆。射

至於司馬。使子路執弓矢出延射。曰、賁軍之將、亡國之大夫與爲人後者、不入。其餘皆入。蓋去者半、入者半。又使公罔之裘・序點揚觶而語。公罔之裘揚觶而語曰、幼壯孝弟、……序點又揚觶而語曰、好學不倦、好禮不變、……とあり、朱子の言う通り「序點」は明らかに人名。

また、東坡の論の粗漏なことについては、「本朝四 自熙寧至靖康用人」（一三〇・三二七）に、「東坡南安軍學記說、古人井田封建不可行、今只有箇學校而已。其間說舜遠不可及得如鄭子產爲鄉校足矣。如何便決定了千萬世無人可以爲舜、只得爲子產。又說古人於射時、因觀者羣聚、遂行選士之法、此似今之聚場相撲相戲一般、可謂無稽之論。自海外歸來、大率立論皆如此」と見える。

59 六一記菱谿石、東坡記六菩薩、皆寓意、防人取去、然氣象不類如此。

六一は「菱谿石」を書き、東坡は「六菩薩」を書いて、どちらにも人に持ち去られないようにという意をこめているが、氣風はこんなにも違う。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く

（注）「菱谿石」は、「菱谿石記」。『歐陽文忠公集』卷六九。六のうち四が失われた菱谿石のため新たに場所を定めたこと

を記す。菱谿石の持ち主であった劉金が、子孫も滅んでいるのに對し、石が六のうち二つはなお存しているのを感じ、「用此可爲富貴者之戒、而好奇之士聞此石者、可以一賞而足、何必取而去也哉」と結ぶ。

「六菩薩」は、「四菩薩閣記」。「蘇軾文集」卷一一。菩薩と天王が描かれた、唐代の藏經藏の門板を、父の遺品として受け取った蘇軾が、それを佛僧に喜捨として與え、大開を建立して藏するに當って記したもの。僧に對して畫板をどのように守るのか問いつめた上で、「軾之以是豫子者、凡以爲先君捨也。天下豈有無父之人歟、其誰忍取之。若其聞是而不悛、不惟一觀而已、將必取之然後爲快、則其人之賢愚、與廣明之焚此者一也。全其子孫難矣、而況能久有此乎。子勉之矣、爲子之不可取者而已、又何知焉」と告げる。いささか人を喰った論法は、歐陽脩の素朴さと對照的と言えよう。

60 老蘇之文高、只議論乖角。 熈

老蘇の文章は調子は高いが、議論に辻褃のあわぬところがある。呂熈記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「乖角」は、雙聲の語。食い違ふこと。

61 老蘇文字初亦喜看、後覺得自家意思都不正當。以此知人不可看此等文字、固宜以歐會文字爲正。東坡子由晚年文字不然、然又皆議論衰了。東坡初進策時、只是老蘇議論。

老蘇の文章を以前はやはり好んで讀んでいたが、後になつて自分の考えは正しくないと思うようになった。それで、人はこういう文章を讀んでいてはだめで、もちろん歐・曾の文章こそ正格とすべきだと悟つた。東坡や子由の晩年の文章はああじゃなかつたが、どちらも議論は衰えてしまつている。東坡が初めて策を献上したときは、老蘇の議論そのままだった。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「東坡初進策」は、蘇軾が歐陽脩に拔擢されたときの對策である「省試刑賞忠厚之至論」(「蘇軾文集」卷二、「宋文鑑」卷二四)を指すか。

62 坡文雄健有餘、只下字亦有不貼實處。 道夫

坡の文章はありあまるばかりに雄壯だが、措辭にはしつくりしないところもある。楊道夫記す。

(注) 「貼實」は、しつくりする。「切實」と同義。12條參

照。

63 坡文只是大勢好、不可逐一字去點檢。義剛。

坡の文章はまったく全體の流れがよいのであって、一字一字をとやかくほじくるべきではない。黃義剛記す。

(注) 「點檢」は、細かく検討すること。「曾南豐議論平正耐點檢」(本朝四 自熙寧至靖康用人) 一三〇・三二七) など。

64 東坡墨君堂記、只起頭不合說破「竹」字。不然、便似毛穎傳。必大

東坡の「墨君堂記」は、出だして「竹」の字をいってしまわないほうがよかった。でなければ、「毛穎傳」のようになつていたのに。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「墨君堂記」は、「宋文鑑」卷八二、「蘇軾文集」卷一。一。「墨君堂」は文與可の堂。そのはじめを引けば、「凡人相與號呼者、貴之則曰公、賢之則曰君、自其下則爾汝之。雖公卿之貴、天下貌畏而心不服、則進而君公、退而爾汝者多矣。

朱子語類論文篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

獨王子猷謂竹君、天下從而君之、無異辭。今與可又能以墨象君之形容、作堂以居君、而屬余爲文、以頌君德、則與可之於君、信厚矣。」

なお、ここには「獨王子猷謂竹君」とあるが、典據である『世說新語』任誕篇46には「何可一日無此君」というのみ。

「說破」は、はっきり言うこと。語類で頻用される。

「毛穎傳」は、韓愈の作。筆を擬人化して傳に仕立てたもの。『韓昌黎文集』卷八。

65 東坡歐陽公文集敘只恁地文章儘好、只要說道理、便看不得、首尾皆不相應。起頭甚麼様大、末後却說詩賦似李白、記事似司馬相如。賀孫。

東坡の「歐陽公文集敘」はこれほど文章はうまいのに、道理を説くとなると、讀んでも分ならず、首尾が照應してない。出だしいかにも壯大だが、最後には「詩賦は李白に似て、事を記すは司馬相如に似る」などという始末だ。葉賀孫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 但要說道理↓但要議論道理 賀孫↓云云

朝鮮古活字本 司馬相如↓司馬遷

(注) 「歐陽公文集敘」は、「六一居士集敘」。「宋文鑑」卷八九、「蘇軾文集」卷一〇。「歐陽子論大道似韓愈、論事似陸贄、記事似司馬遷、詩賦似李白。」なお、「司馬相如」は、「六一居士集敘」では、「司馬遷」であり、無論それが正しい。

朱子はまた別の條でも、この文章が「龍頭蛇尾」であることをつぎのようにいう。

「東坡天資高明、其議論文詞自有人不到處。如論語說亦煞有好處、但中間須有些漏綻出來。如作歐公文集序、先說得許多天來底大、恁地好了、到結末處却只如此、蓋不止龍頭蛇尾矣。當時若使他解虛心屈己、煅煉得成甚次第來。」(「本朝四自熙寧至靖康用人」一三〇・三二三)

「儘好」は、現代語の「很好」と同じ。

「起頭」は、始め、「末後」は、終り。

66 統領商榮以溫公神道碑爲餉。先生命吏約道夫同視。且曰、「坡公此文、說得來恰似山摧石裂。」道夫問、「不知旣說誠、何故又說一。」曰、「這便是他看道理不破處。」頃之、直卿至、復問、「若說誠之、則說一亦不妨否。」曰、「不用恁地說、蓋誠則自能一。」問、「大凡作這般文字、不知還有布置否。」曰、「看他也只是據他一直在恁地說將去、初無布置。」

如此等文字、方其說起頭時、自未知後面說甚麼在。」以手指中間曰、「到這裏、自說盡、無可說了、却忽然說起來。

如退之・南豐之文、却是布置。某舊看二家之文、復看坡文、覺得一段中欠了句、一句中欠了字。」又曰、「向嘗聞東坡作韓文公廟碑、一日思得頗久。饒錄云、不能得一起頭、起行百十遭。忽得兩句云、匹夫而爲百世師、一言而爲天下法。遂掃將去。」道夫問、「看老蘇文、似勝坡公。黃門之文、又不及東坡。」曰、「黃門之文衰、遠不及、也只有黃樓賦一篇爾。」道夫因言歐陽公文平淡。曰、「雖平淡、其中却自美麗、有好處、有不可及處、却不是闌茸無意思。」又曰、「歐文如賓主相見、平心定氣、說好話相似。坡公文如說不辦後、對人鬧相似、都無恁地安詳。」蜚卿問范太史文。曰、「他只是據見定說將去、也無甚做作。如唐鑑雖是好文字、然多照管不及、評論總意不盡。只是文字本體好、然無精神、所以有照管不到處。無氣力、到後面多脫了。」道夫因問黃門古史一書。曰、「此書儘有好處。」道夫曰、「如他論西門豹投巫事、以爲他本循良之吏、馬遷列之於滑稽、不當。似此議論、甚合人情。」曰、「然。古史中多有好處。如論莊子三四篇識

議夫子處、以爲決非莊子之書、乃是後人截斷莊子本文攙入、此其考據甚精密。由今觀之、莊子此數篇亦甚鄙俚。」道夫。

統領の商榷が「溫公神道碑」を贈り物にした。先生は下吏を道夫のもとにやつて一緒に見るよう約束した。いわれるには、「坡公のこの文章は、山が崩れ石が裂けるような書きっぷりだ。」道夫が尋ねた、「誠」といった上に、なぜまた「一」というのでしょうか。」いわれるには、「これこそ彼が道理を見抜けていないところなのだ。」しばらくして、直卿がやってきて、また尋ねた、「之を誠にす」といつていれば、「一」といつてもかまわないのじゃありませんか。」いわれるには、「そんなふうにいわなくなつたつて、「誠」ならおのずと「一」になるものだ。」たずねるに、「こうした文章を作るとき、構想があつたのでしょうか。」いわれるには、「彼もただ勢いに任せて書いていつたままで、構想などなかつたようだね。こういった文章は、書き始めるときには、あとで何を書くやら見當がついていないのさ。」手で文中を指していわれるには、「ここまでで、述べつくしてしまつて、いうことがなくなつてから、またひ

よいと述べはじめる。退之や南豊の文章には、構想がある。私は昔この二人の文章を讀んだあとで、東坡の文章を讀むと、段には句が足りず、句には字が足りないように感じたものだ。」

またいわれるには、「東坡が「韓文公廟碑」を作つたとき、一日中考えあぐねていたところへ（饒録に、「書き出しが出てこず、百遍以上も書き直した」という）、ふと「匹夫にして百世の師と成り、一言にして天下の法と成る」の二句を思いつき、それから一氣に書きあげたと、以前聞いたことがある。」道夫が「老蘇の文章は坡公にまさっているようですし、黃門の文章は、東坡には及ばないようですね」と尋ねると、いわれるには、「黃門の文章は力が弱くて、遠く及ばず、「黃樓賦」一篇があるだけだ。」道夫がそこで歐陽公の文章は平淡ですなという、いわれるには、「平淡ではあるが、そこがおのずと美しく、よいところ、まねできないところもあつて、平板でつまらんものとはわけが違ふ。」またいわれるには、「歐公の文は主客が向き合つて、靜かに落ち着いた氣持で、楽しい話をしてるようだ。坡

公の文はうまく話がつけられなくて、相手につっかかっているようで、そうした穩やかさのかけらもない。」蜚卿が范太史の文章について尋ねると、いわれるには、「彼はただ先入見のままに述べていくだけで、なにも工夫がない。

『唐鑑』はよい文章だが、注意の及ばぬところが多く、論評はいつも意を盡くしていない。文章自體はよいが、元氣がないから、注意の至らないところがでてくるし、力がなから、後のほうでぬかりが多くなってしまう。」道夫がそこで黃門の『古史』という書についてたずねると、「この書物はよいところがとても多いね」といわれた。道夫が、「例えば彼は西門豹が川に巫を投げこんだことを論じて、西門豹は元來法を守る役人なのに、司馬遷が滑稽列傳に列したのは、おかしいとしています。こういう議論は、氣持にしっくりくるようですが」というと、いわれるには、「そうだ。『古史』にはよいところが多い。例えば『莊子』のいくつかの篇が夫子を非難しているところを論じて、それらは決して莊子の書いたものではなく、後人が『莊子』の本文を裁斷して竄入させたものだとしているが、これは

考證がたいへん精密だ。今から見ると、『莊子』のこの數篇はたいへん低俗なものだ。」楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 說得來恰似山摧石裂↓說得來恰却似山摧石裂 某舊看二家之文↓某舊有二家之文 饒錄云↓百十遭↓缺 忽得兩句云↓忽得兩句 甚合人情↓以道夫觀之甚合人情 由今觀之↓但今觀之

朝鮮古活字本 蜚卿問半范太史文↓蜚卿問半范太史文 由今觀之↓但今觀之

(注) 「統領」は、軍官名。統制の下に置かれた。『宋史』卷一六七「職官志」七「諸軍都統制・副都統制・統制・統領」の項に詳しい。

「商榮」は、未詳。朱子「與林擇之書」(『朱文公文集卷二七』)に、「向見帥喚得商榮者在彼、後來看得如何」とある。「商榮」と同一人物であろう。『宋史』卷三八によれば、開禧三(一一〇七)年には福建路總管兼延祥水軍統制の位であった。

「溫公神道碑」は、『蘇軾文集』卷一七。ここで問題になっている箇所は、その「論公之德、至於感人心、動天地、魏巍如此。而蔽之以二言曰誠、曰一」という部分であるが、朱子は別の箇所ではこう述べている。「溫公墓碑云、曰誠、曰一。人多議之、然亦未有害。誠者、以其表裏言之。一者、以其始終言之。」(『本朝四 自熙寧至靖康用人』一三〇・

3114)

「説得來」は、32條に既出。「得來」は「山摧石裂」という補語を導く。

なお、直卿が「誠」と「誠之」の區別を言うのは、「中庸」に、「誠者、天之道也。誠之者、人之道也。誠者不勉而中、不思而得、從谷中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也」とあるのにもとづく。

「直卿」は、黄餘のこと。

「布置」は、配置。「按排」と同様、準備や段取の意で用いられることが多いが、文章についていうなら、構想や組立ということになろう。

句末の「在」は、現代語の「呢」に同じ。

「韓文公廟碑」は、「潮州韓文公廟碑」。「蘇軾文集」卷一七。冒頭の「匹夫而爲百世師、一言而爲天下法」の句は、「孟子」盡心下の「聖人百世之師也」及び「禮記」中庸の「是故君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則」の句を踏まえたもの。

「黃門」は、蘇轍のこと。

「黃樓賦」は「樂城集」卷一七。熙寧一〇（一〇七七）年の黄河の氾濫のち、彭城（山東省）太守だった蘇軾が水害防止のために建てた城門に建てた蘇轍が登って詠じた賦。蘇軾の「答張文潛縣丞書」（「蘇軾文集」卷四九）には、「子由之文實勝僕、而世俗不知、乃以爲不如。其爲人深不願

朱子語類論文篇譯注（二）（興膳・木津・齋藤）

人知之、其文如其爲人、故汪洋澹泊、有一唱三歎之聲、而其秀傑之氣、終不可沒。作「黃樓賦」、乃稍自振厲、若欲以警發憤憤者、而或者便謂僕代作、此尤笑。是殆見吾善者機也」とある。

「平淡」は、消極的な意味にも積極的な意味にも用いうるが、こゝは、曾絃が「陶公詩、造語平淡而寓意深遠、外若枯槁、中實敷腴、眞詩人之冠冕也」（李公煥「箋注陶淵明集」引）と云うような、積極的意味へと朱子は展開している。

「闌茸」は、下品なさま。古くは「楚辭」にも見える語だが、宋代でも白話として盛んに用いられている。「或曰、今世士大夫不詭隨者、亦有五六人。曰、此輩在向時、本是闌茸人、不比數底。」（本朝六 中興至今日人物下）一三二・三二三）

「蜚卿」は、黃伯羽。

「范太史」は、范祖禹、字は淳夫、また夢得。華陽の人。一〇四二～一〇九八。「宋史」卷三三七。司馬光に從つて「資治通鑑」編纂の任にあつた。「唐鑑」は、范祖禹撰、初め十二卷、のち呂祖謙が注を施して二十四卷とした。「資治通鑑」編纂時に唐代を擔當した范祖禹が、自ら得た所を以て別に行なつたもの。「讀書法下」四條も參照。

「見定」は、先入見。「眼前朋友大率只是據見定了、更不求進步。」（訓門人九）一一・2925）

「做作」は、わざわざすること、また、工夫。「誠者、是

簡自然成就底道理、不是人去做、作安排底物事。」(中庸三第二十五章)六四・(1576)

「古史」は、蘇轍撰、六十卷。伏羲・神農から秦の始皇帝までを紀傳體で記したものである。

「西門豹投巫事」は、「史記」卷一三六「滑稽列傳」に見える。「古史」卷六十には、「蘇子曰、太史公傳滑稽三人、褚先生一人、皆以優笑有益於事、故並錄之。然西門豹古循吏、非滑稽者也。特以止河伯娶婦事、發於俳、故巧而捷。是以載之滑稽、而實非也」と云う。

「莊子三四篇譏議夫子」は、「莊子」の「漁父」「盜跖」「胠篋」篇のこと。「古史」卷三三。また蘇軾の「莊子祠堂記」(『樂城集』卷一一)を参照。

67 或問、「蘇子由之文、比東坡稍近理否。」曰、「亦有甚道理。但其說利害處、東坡文字較明白、子由文字不甚分曉。要之、學術只一般。」因言、「東坡所薦引之人多輕儻之士。若使東坡爲相、則此等人定皆布滿要路、國家如何得安靜。」賀孫。

ある人が「蘇子由の文章は、東坡よりはいくらか道理に近いのではないでしようか」とたずねると、「なんの道理

があるものか。利害を説くところでは、東坡の文章はやや筋道立っているが、子由の文章はあまり明晰でない。要するに、學問は同じようなものさ」といわれた。そこでいわれるには、「東坡の引き立てた者には輕佻浮薄の士が多い。もし東坡が宰相になっていたら、きっとこうした連中が要路を占めて、國が安寧であるはずもなかつたらう。」葉賀孫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 或問↓問 比東坡稍近理否↓比東坡稍近理 則此等人定皆布滿要路↓則此等人材定皆布滿要路 賀孫↓人傑

(注) 「輕儻」は、輕佻浮薄なこと。「因言仁宗朝、講書楊安國之徒、一時聚得幾箇朴純無能之人、可笑。先生曰、此事緣范文正招引一時才俊之士、聚在館閣。如蘇子美・梅聖俞之徒、此輩雖有才望、雖皆是君子黨、然輕儻戲謔、又多分流品。」(『本朝三 自國初至熙寧人物』二一九・3088)

68 諸公祭溫公文、只有子由文好。

諸公が溫公を祭つた文では、子由のだけがよい。

(校勘) 朝鮮古寫本 記錄者名缺↓庚

(注) 蘇轍が司馬光を祭つた文章は、未詳。あるいは歐陽脩

を祭つた文章〔祭歐陽少師文〕『樂城集』卷二六のあやま
りか。

69 「歐公大段推許梅聖俞所注孫子、看得來如何得似杜牧
注底好。以此見歐公有不公處。」或曰、「聖俞長於詩。」曰、
「詩亦不得謂之好。」或曰、「其詩亦平淡。」曰、「他不是平
淡、乃是枯槁。」拱壽。

「歐公は梅聖俞の孫子注をたいへん推獎しているが、見
たところ杜牧の注のよさには及びもつかない。歐公にも不
公平なところのあるのがわかる。」ある者が、「聖俞は詩に
すぐれていますね」というと、「詩だってよいとはいえん
さ」といわれた。ある者が、「彼の詩はやはり平淡ですね」
というと、「平淡じゃなくて、ひからびているのさ」とい
われた。董拱壽記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 拱壽↓録
(注) 「梅聖俞」は、梅堯臣、聖俞は字。「宋史」卷四四三。
「歐公大段推許梅聖俞所注孫子」は、「孫子後序」〔歐陽
文忠公集〕卷四二に、「世所傳孫武十三篇、多用曹公・杜
牧・陳暉注、號三家孫子。……是以注者雖多而少當也。獨吾

朱子語類論文篇譯注 (三) (興膳・木津・齋藤)

友聖俞不然。……吾知此書當與三家並傳、而後世取其說者、
往往於吾聖俞多焉。聖俞爲人謹質溫恭、衣冠進趨、眇然儒者
也。後世之視其書者、與太史公疑張子房爲壯夫、何異」とあ
るのを指す。

「平淡」は、66條注を参照。梅堯臣の詩は「平淡」を尊ん
だ。「詩本道情性、不須大厥聲、方聞理平淡、昏曉在淵明」
〔答中道小疾見疾〕『宛陵先生集』卷二十四など、彼の作
品に少なからず見えている。

「枯槁」は、干涸らびて生氣のないさま。嚴羽『滄浪詩
話』に「孟郊之詩、憔悴枯槁、其氣局促不伸」という。

70 范淳夫文字純粹、下一箇字、便是合當下一箇字、東坡
所以伏他。東坡輕文字、不將爲事。若做文字時、只是胡亂
寫去、如「□□□□」後面恰似少後添。節

范淳夫の文章は、まじりけがなく、一字を書くにも、書
くべき字を書く。だから東坡は彼に頭が上がりたのだ。
東坡は文章を軽んじ、大したことと考えなかった。文章を
書くときは、いいかげんに書いていった。□□□□のよう
なものは、あとで足りなくて書き足したようだ。甘節記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 下一箇字↓下一个字 如後面↓如□□

□(缺三字)後面

朝鮮古活字本 如後面↓如□□□(缺三字)後面

(注) テキストには三字の脱字があり、ここには、もと、具體的な篇名が擧がっていたものと思われる。

東坡が、范淳夫に頭が上がらなかったことは、晁説之「晁氏客語」に「東坡好戲謔語言或稍過、范淳夫必戒之。東坡每與人戲、必祝曰勿令范十三知。淳夫舊行第十三也。」

71 後來如汪聖錫制誥、有溫潤之氣。曾問某人、前輩四六語孰佳。答云、「莫如范淳夫。」因舉作某王加恩制云、「周尊公旦、地居四輔之先。漢重王蒼、位列三公之上。若昔仁祖、尊事荆王。顧子冲人、敢後茲典。」自然平正典重、彼工於四六者却不能及。」德明。

のちの汪聖錫の制誥のようなものは、溫潤の氣がある。かつてあの人に、前人の四六文では誰のがよいかと尋ねると、「范淳夫がいちばんだ」と答え、「某王に恩を加うる制」を擧げて「周は公旦を尊び、地を四輔の先に居らしむ。漢は王蒼を重んじ、位を三公の上に列す。若昔仁祖は、荆王を尊事ぶ。ただわれ冲人、敢えてこの典を後にせん

や」というのは、おのずと安定して重々しく、四六に巧みな者は及びもつかない」といつていた。廖德明記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 後來如汪聖錫制誥↓後來汪聖錫制誥 曾問某人↓曾問人

朝鮮古活字本 後來如汪聖錫制誥↓後來汪聖錫制誥

(注) 「汪聖錫」は、汪應辰、聖錫は字。「宋史」三八七、「宋元學案」四六。

「某人」は、ふつう不特定の「ある人」を指すが、ここでは汪聖錫のことをいうか。また、「作某王加恩制」を擧げたのも、朱子でなく汪であると解して譯した。

「某王に恩を加うる制」は、「徐王改封冀王制」。「宋文鑑」卷三六。「范太史集」卷三三。その冒頭に、「周尊公旦、倚爲四輔之制、漢重王蒼、位處三公之上。及我仁祖、加禮荆王、顧惟冲人、敢後叔父」とある。なお「宋文鑑」では「三公」を「三公」に作る。

「王蒼」は、建平王劉蒼。

72 劉原父才思極多、涌將出來、每作文、多法古、絕相似。有幾件文字學禮記、春秋說學公穀、文勝負父。振。劉原父は文才が豊かで、つぎつぎと湧き出てくる。文章を作るさいには、せつせと古えに倣い、とてもよく似てい

た。いくつかの文章は「禮記」を眞似、「春秋說」は「公羊」
「穀梁」を眞似ている。文章は貢父より上だ。吳振記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「才思」は、文才。「問學究一科沿革之故。曰、此科
即唐之明經是也。進士科則試文字、學究科但試墨義。有才思
者多去習進士科、有記性者則應學究科。」(本朝二法制
一〇二八・3079)

「劉原父」は、劉敞、原父は字、諡は文正。『宋史』卷三
一九、歐陽脩に墓誌「集賢院學士劉公墓誌銘」がある。『歐
陽文忠公集』卷三五。「公是集」五四卷有り。

「春秋說」は、『春秋傳』十五卷。『春秋』三傳を節録し、
己の意を以て解釋を加えたもの。

「貢父」は、劉敞、貢父は字。劉敞の弟。『宋史』卷三二九。

73 劉貢父文字工於摹倣。學公羊儀禮。若海。

劉貢父の文章は、模倣に巧みだ。「公羊」「儀禮」を眞似て
いる。楊若海記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 學公羊儀禮↓缺

74 蘇子容文慢。義剛。

朱子語類論文篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

蘇子容の文章はしまりがいい。黃義剛記す。

(注) 「蘇子容」は、蘇頌、子容は字。『宋史』卷三四〇。
『蘇魏公文集』七二卷有り。

75 南豐文字確實。道夫。

南豐の文章はしっかりしている。楊道夫記す。

(注) 「確實」は、しっかりしていること。「上蔡語雖不能
無過、然都是確實做工夫來。」(程子門人)一〇一・2562)

76 問、「南豐文如何。」曰、「南豐文却近實。他初亦只是
學爲文、却因學文、漸見些子道理。故文字依傍道理做、不
爲空言。只是關鍵緊要處、也說得寬緩不分明。緣他見處不
徹、本無根本工夫、所以如此。但比之東坡、則較質而近理。

東坡則華豔處多。」或言、「某人如搏謎子、更不可曉。」曰、
「然。尾頭都不說破。頭邊做作掃一片去也好、只到尾頭、
便沒合殺、只恁休了。篇篇如此、不知是甚意思。」或曰、
「此好奇之過。」曰、「此安足爲奇。觀前輩文章如賈誼・董
仲舒・韓愈諸人、還有一篇如此否。夫所貴乎文之足以傳遠、

以其議論明白、血脈指意曉然可知耳。文之最難曉者、無如柳子厚。然細觀之、亦莫不自有指意可見、何嘗如此不說破。其所以不說破者、只是吝惜、欲我獨會而他人不能、其病在此。大概是「不肯蹈襲前人議論、而務爲新奇。惟其好爲新奇、而又恐人皆知之也、所以吝惜。」個

「南豐の文章はどうですか」と尋ねると、いわれるには、「南豐の文章はまあ質實だ。彼も初めはただ作文を學ぶだけだったが、文章を學ぶことで、しだいにいくらか道理がわかってきた。だから文章は道理に沿って作られていて、空言ではない。しかし肝心かなめのところになると、いい方がたるんできて、不明瞭だ。彼の考えが徹底せず、根本的な努力がまるでないから、こんなふうになるのだ。けれども東坡に比べれば、かなり質實で道理に近い。東坡ははでなところが多い。ある人が、「あの人は謎かけをしているようで、ちつとも分かりません」というと、いわれるには、「そうだ。結末に來てもいい切らない。出だしであれこれいいたてるのはよいのだが、終りに來ても、ちゃんと始末をつけずに、そのままになってしまふ。どの文章もみ

なそうだが、どういつつもりなのかね。」ある人が、「奇をてらう過ちでしょう」というと、いわれるには、「何が奇なものか。賈誼や董仲舒や韓愈のような前人の文章を見ても、いったいこんなものがあつたかね。文章が遠くに傳わるために大切なのは、議論が明瞭で、筋道や趣旨がはっきりわかることだ。最もわかりにくい文章という點では、柳子厚がいちばんだ。だが、仔細に讀むと、ちゃんと趣旨は見えてきて、こんなふうにいikiranないのとはわけがちがう。どうしていいきらないかという、ただもうケチで、自分だけがわかって人にはわからないようにしようとしており、それがよくないのだ。だいたい前人の議論を踏まえずに、新奇な説を立てようとしている。新奇な説を立てるのが好きなくせに、人がみな知りはしないかと恐れる。そこがケチなのさ。」沈備記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 故依傍道理做不爲空言↓故依傍道理故不爲空言 緊要↓(細字雙行) 但比之東坡↓此但比之東坡則較質↓則又較質 搏謎子↓搏健子 以其議論明白↓以其議論明

(注) 「依傍」は、従うこと。「凡其所謂冠昏喪祭之禮、與

夫典章制度、文物禮樂、車輿衣服、無一件是聖人自做底。都是天做下了、聖人只是依傍他天理行將去。」〔尙書一〕七八・2020)

「寬緩」は、「聖人之言寬緩、不急迫」〔論語十四〕三二・806)のように、よい意味でも用いられるが、ここでは、だらけていること。「只看濂溪・二程・橫渠們說話、無不斬截有力、語句自是恁地重。無他、所以看得如此寬緩無力者、只是心念不整肅、所以如此。緣心念不整肅、所以意思寬緩、都湊泊他那意思不著、說從別處去。須是整肅心念、看教他意思嚴緊、說出來有力、四方八面截然有界限、始得。如今說得如此支蔓、都不成箇物事、其病只在心念不整肅上。」〔朱子十八 訓門人九〕一一一・2929)

「搏謎子」は、謎かけをすること。

「做作」は、「做作」の形は、「而今人做作說一片、只是不如他」〔孟子三 公孫丑上之下〕五三・1283)。

「尾頭」は、最後。「若說是起頭、又遣了尾頭。說是尾頭、又遣了起頭。若說屬中間、又遣了兩頭。不用如此說。」〔中庸一〕六一・1500)

「合殺」は、しまつする。「看孔叢子撰許多說話、極是陋。只看他撰造說陳涉、那得許多說話正史都無之。他却說道自好、陳涉不能從之。看他文卑弱、說到後面、都無合殺。」〔老氏附註列〕一一五・2993)

「所貴乎文之足以傳遠」は、「左傳」襄公二十五年の文、

朱子語類論文篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

「仲尼曰、志有之、言以足志、文以足言、不言誰知其志、言之無文、行而不遠」を踏まえた語。

「吝惜」は、物惜しみすること。けち。「驕却是枝葉發露處、吝却是根本藏蓄處。且以淺近易見者言之、如說道理、這自是世上公共底物事、合當大家說出來。世上自有一般人、自恁地吝惜、不肯說與人。這意思是如何。他只怕人都識了、却沒說異、所以吝惜在此。獨有自家會、別人都不會、自家便驕得他、便欺得他。如貨財也是公共底物事、合便使著使。若只恁地吝惜、合使不使、只怕自家無了、別人却有、無可強得人、所以吝惜在此。獨是自家有、別人無、自家便做大、便欺得他。」〔論語十七〕三十五・938)

77 曾所以不及歐處、是紆徐揚錄作「餘」。曲折處。曾喜模擬人文字、擬峴臺記、是做醉翁亭記、不甚似。

曾が歐に及ばないのは、紆徐揚揚の記録では「餘」に作る。曲折のところだ。曾は他人の文章を真似るのが好きで、「擬峴臺記」は「醉翁亭記」に倣ったものだが、あまり似ていない。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 是做醉翁亭記↓是做醉翁亭記

(注) 「曾」は曾鞏、「歐」は歐陽脩。

「紆徐」は、揚録では「徐」を「餘」に作るというが、いずれにしても疊韻の語であり、意味に違いはない。なお「紆徐」は司馬相如「子虛賦」にも見える古い語。「紆餘曲折」は、47條参照。

「擬峴臺記」は、中華書局『曾鞏集』卷一八。峴山に擬した臺を作った裴君のために記したもの。全體の構成もさることながら、「若夫煙雲開斂、日光出沒、四時朝暮、雨暘明晦、變化不同、則雖覽之不厭、而雖有智者、亦不能窮其狀也」などの部分は、「醉翁亭記」の「若夫日出而林霏開、雲歸而巖穴暝、晦明變化者、山間之朝暮也。……朝而往、暮而歸、四時之景不同、而樂亦無窮也」の部分を想起させよう。「醉翁亭記」は、51條を参照。

78 南豊擬制内有數篇、雖雜之三代誥命中亦無愧。必大。

南豊の擬制のうちの數篇は、三代の誥命の中に置いても見劣りしない。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 『曾鞏集』は卷二三から二六に制誥擬詞を載せる。

「三代誥命」とは、『尚書』に載せられた誥命を廣く指す。

79 南豊作宜黃・筠州二學記好、說得古人教學意出。義剛。

南豊の宜黃・筠州の二學記はよくできていて、古人の教學の意がうまく表われている。黃義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 宜黃↓宜興 義剛↓義剛、陳淳錄同

(注) 「宜黃・筠州二學記」は、『宜黃縣縣學記』(『曾鞏集』卷一七) および「筠州學記」(『曾鞏集』卷一八) のこと。宜黃・筠州ともにいまの江西省。それぞれの縣學・州學のために書かれた記であるが、どちらも教學のあり方についての議論から起こす。

80 南豊列女傳序說二南處好。

南豊の「列女傳序」で「二南」を説くところはよくできている。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「列女傳序」は、「列女傳目錄序」(『曾鞏集』卷一一)。「世皆知文王之所以興、能得內助、而不知所以然者、蓋本於文王之躬化、故內則后妃有關雎之行、外則羣臣有二南之美、與之相成。其推而及遠、則商辛之昏俗、江漢之小國、免置之野人、莫不好善而不自知、此所謂身修故國家天下治者也。後世自學問之士、多徇於外物而不安其守、其家室既不見可法、故競於邪侈、豈獨無相成之道哉」などとある邊りが、朱子の指すところであろう。

81 南豐范貫之奏議序、氣脈渾厚、說得仁宗好。東坡趙清獻神道碑說仁宗處、其文氣象不好。「第一流人」等句、南豐不說。子由挽南豐詩、甚服之。

南豐の「范貫之奏議序」は、なぐれ「氣脈がどっしり」として、仁宗のことをうまく述べている。東坡の「趙清獻神道碑」で仁宗のことを述べたところは、文の氣象すがたがよくない。「第一流人」といった句は、南豊なら言わない。子由の南豊を弔った詩では、はなはだ敬服している。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「范貫之奏議序」は、『曾鞏集』卷一二。仁宗のことは、「仁宗常虚心采納、爲之變命令、更廢舉、近或立從、遠或越月逾時、或至於其後、卒皆聽用。蓋當是時、仁宗在位幾久、熟於人事之情僞與羣臣之能否、方以仁厚清靜休養元元、至於是非與奪、則一歸之公議、而不自用也」などと述べられる。范貫之は、范師道。貫之は字。蘇州長州の人。「宋史」卷三〇二。

「趙清獻神道碑」は、「趙清獻公神道碑」、「蘇軾文集」卷一七。「臣軾逮事仁宗皇帝。蓋嘗竊觀天地之盛德、而窺日月之末光矣。未嘗行也、而萬事莫不畢舉。未嘗視也、而萬物莫不畢見。非有他術也、善於用人而已。惟清獻公擢自御史。是時將用諫官御史、必取天下第一流、非學術才行備具爲一世所

朱子語類論文篇譯注 (三) (興膳・木津・齋藤)

高者不與」と述べられる。趙清獻公は、趙抃、字は閱道、衢州西安の人。「宋史」卷三二六、「宋元學案」卷一二。

「子由挽南豐詩」は、「曾子固舍人挽詞」、「樂城集」卷一三。「少年漂泊馬光祿、末路饑騰朱會稽。儒術遠追齊稷下、文詞近比漢京西。平生碑板無容繼、此日銘詩誰爲題。試數虛陵門下士、十年零落曉星低。」

82 兩次舉南豊集中范貫之奏議序末、文之備盡曲折處。方(先生は)「南豊集」の「范貫之奏議序」の最後、文の委曲が盡くされたところを、二度挙げられた。楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「范貫之奏議序」は、前條注參照。

83 南豊有作郡守時榜之類爲一集、不會出。先生舊喜南豊文、爲作年譜。

「南豊には郡守をしていたときの告示の類をまとめて集にしたものがあるが、世に出していない。」先生は前から南豊の文章が好きで、その年譜を作られた。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 爲作年譜↓寫作年譜

〔注〕「直齋書錄解題」には「年譜朱熹所輯也」といい、

『元豐類藁』に付載される年譜序および後序にも「丹陽朱子曰」の五字がある。また、朱熹「跋曾南豐帖」には「熹未冠而讀南豐先生之文、愛其詞、嚴而理正、居常誦習、以爲人之爲言必當如此」(『朱文公文集』卷八三)という。

84 問、「嘗聞南豐令後山一年看伯夷傳、後悟文法、如何。」曰、「只是令他看一年、則自然有自得處。」

「南豐が後山に一年間「伯夷傳」を讀ませて、文の組みたてを悟らせたと聞きましたが、どうでしょうか」とおたずねすると、「ひたすら一年讀ませれば、おのずと自得するところもあつたらうさ」といわれた。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 看一年↓看一年

〔注〕「伯夷傳」は、『史記』卷六一「伯夷叔齊列傳」。

「文法」は、文の組立て。「孟子、全讀方見得意思貫。某因讀孟子、見得古人作文法、亦有似今人開架」(『論語一語孟綱領』一九)にある「作文法」と通じよう。

あとの「一年」を、朝鮮古活字本では「二年」に作る。も

しそうであれば、「もし二年讀ませたなら自得しただろうに」との假想になる。曾鞏と陳師道については、55條を参照。

85 江西歐陽永叔・王介甫・曾子固文章如此好。至黃魯直一向求巧、反累正氣。必大。

江西でも歐陽永叔・王介甫・曾子固の文章はこんなによいのに、黃魯直になるとひたすら技巧を追つて、かえつて正氣が損なわれた。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕「歐陽永叔」「王介甫」「曾子固」「黃魯直」は、それぞれ歐陽修・王安石・曾鞏・黃庭堅。

朱子の「江西」に對する評價は總じて辛辣である。17條参照。

「黃魯直一向求巧」については、7條を参照。

「正氣」は、「天地之正氣」として「語類」にも散見される語。41條にいう「和氣」とも通じよう。

86 「陳後山之文有法度、如黃樓銘、當時諸公都斂衽。」佐錄云、「便是今人文字都無他抑揚頓挫。」因論當世人物、有以

文章記問爲能、而好點檢他人、不自點檢者。曰、「所以聖人說、益者三樂、樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友。」至。

「陳後山の文章には規律がある。「黄樓銘」のようなのは、當時の大家がみな恐れ入ったものだ。蕭佐の記録には、「つまり今の人の文章にはかれの抑揚頓挫のかけらもないのだという。」そこで當世の人物には、文章の暗記を能事として、他人のあら探しは好きでも、自分のあらは探さない者がいることを論じられた。いわれるには、「だから聖人は、「益者に三樂あり、禮樂を節するを樂しみ、人の善を道うを樂しみ、賢友多きを樂しむ」といわれたのだよ。」楊至記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「黄樓銘」は、55條参照。

「頓挫」は、起伏、抑揚。38條の「曲折」とも通じる。

「記問」は、暗記。『禮記』學記に「記問之學、不足以爲人師」とあり、鄭注に「記問、謂豫誦雜難雜說、至講時、爲學者論之、此或時師不心解、或學者所未能力問」という。また歐陽修「蔡君山墓誌銘」(『歐陽文忠公集』卷二八)には、「學者以記問應對爲事、非古取士之意也」と云う。

「點檢」は、63條を参照。

朱子語類論文篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

「益者三樂、……」は『論語』季氏のことば。

87 館職策、陳無己底好。

「館職策」は、陳無己のがよい。

(注) 「陳無己」は、陳師道。「館職策」は、55條参照。

88 李清臣文飽滿、雜說甚有好議論。

李清臣の文章は充實していて、雜說にはよい議論がたくさんある。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「李清臣」は、字邦直、安陽の人。一〇三二―一一〇二。兩朝國史編修官として神宗に召される。『宋史』卷三八、「宋元學案」卷九六。

「飽滿」は、満ち足りていて缺けるところがないこと。

「呂與叔文集煞有好處。他文字極是實、說得好處、如千兵萬馬、飽滿、仇壯。」(『程子門人』一〇一・2556)

89 李清臣文比東坡較實。李舜舉水樂敗死、墓誌說得不明、看來是不敢說。

李清臣の文章は東坡よりかなり中身がある。だが李舜舉が永樂で敗死したことは、墓誌ではあいまいにしか述べられてない。いいにくかったのだろうね。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 永樂↓未洛

(注) 「李舜舉」は、字は公輔、開封の人。「宋史」卷四六七。永樂で賊に圍まれて戦死した。

90 桐陰舊話載王銍云、李邦直作韓太保惟忠墓誌、乃孫巨源文也。先生曰、「巨源文溫潤、韓碑徑、只是邦直文也。」

「桐陰舊話」には、李邦直の「韓太保惟忠墓誌」が、實は孫巨源の文章だと王銍がいった話が載っている。先生がいわれるには、「巨源の文章にはうるおいがあるが、「韓碑」は直截で、まさしく邦直の文章だ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「桐陰舊話」は、韓元吉の撰。早くに滅び、輯本のみが傳わる。この話は佚。

「王銍」は、字性之、汝陰の人。「宋元學案補遺」卷四。

「韓太保惟忠墓誌」は、「韓太保惟忠墓表」(「名臣碑傳琬琰集中集」卷四一)。韓惟忠は、韓億の曾祖父。

「孫巨源」は、孫洙、巨源は字、廣陵の人。一〇三一—一〇七九。「宋史」卷三二一。

「韓太保惟忠墓表」には、「元豐元年秋九月、丞相自太原易鎮定武、乃詣靈壽。既祠謁幕下、因屬清臣爲之表、而得陽翟孫曼叔書于石」と説明され、「說郛」卷二〇の引く「桐陰舊話」には「王云、……李公邦直爲墓表、孫康簡公曼叔書之」という。孫康簡は、孫永(一〇二〇—一〇八七)、康簡は諡名、曼叔は字。つまり李清臣が文章を書き、孫洙でなく孫永が石刻のために書寫したのである。

編集後記

本稿作成にあたり、氏岡眞士・幸福香織・蔡毅・錢嶋・中純子・原田直枝・森田浩一各氏のレジュメを参考にした。また、金文京氏より教示を受けた箇所がある。謝意を表する。